

人事院月報2018年4月号より

人事院では、各府省の行政官を6か月間又は1年間、諸外国の政府機関等に派遣し、それぞれの課題についての調査研究に従事させる行政官短期在外研究員制度を実施しています。

これまでに、1,400名以上が研究員として派遣されており、これらの研究員が海外で調査した内容は、関連する行政分野における貴重な資料として活用されています。

同制度への応募のきっかけや派遣に至る準備、派遣中の様子について、昨年スウェーデンに派遣された研究員の手記を紹介します。

短期在外研究員制度のすすめ

平成28年度行政官短期在外研究員

平成29年2月13日から8月11日までの半年間、人事院の「短期在外研究員制度」により、スウェーデンのヨーテボリ大学に派遣されました。本稿では、調査の準備や現地での様子などを幅広く書きたいと思います。実りの多かったこの経験を知っていただくことで、この制度が広く認知され、多くの職員に利用されることを期待します。

なお、調査内容については紙面の都合で割愛しました。日本社会薬学会の学会誌「社会薬学」に結果の一部を寄稿していますのでそちらをご参照いただくと幸いです。

1. 調査研究課題の選定について

10年以上前になるでしょうか、同じ職種の先輩が短期在外研究員としてアメリカに派遣されたのを見て、この制度を知りました。これまで健康保険や年金に関する部局を中心に仕事をしてきたため、他国の健康保険制度や年金制度について調査しようと思ったのですが、過去の調査研究課題を確認したところ、既にいくつかの国でこれらの調査が行われていました。これまで調査されていない国で同様の調査研究を行うことも検討しましたが、目新しさがないため、他の着眼点で何かないか探していました。

その頃、日本で「マイナンバー」の導入の議論が進んでいました。ただ、その活用事例については、まだ大きな議論にはなっていませんでした。諸外国の同様の制度について調べたところ、どうやら北欧諸国では既に住民登録番号が普及していて、実生活にも深く浸透しているとのことでした。特にスウェーデンでは、住民登録番号が運転免許証や医療の受診の際にも利用されるだけでなく、住民登録番号で紐付けされた大規模データが医学研究にも活用されていると聞き、これらについて調査したいと考えました。

2. 派遣先が「非英語圏」？

短期在外研究員制度を利用して海外で研究をしようと考えた際に重要なのは派遣先ですが、派遣先国としてどこを思い浮かべるでしょうか。これまで英語の勉強をしてきたから、英語を母国語とする国、例えば米国かな？英国かな？と思われがちです。果たして他にないのでしょうか。

今回、私は派遣先としてスウェーデンを選びました。スウェーデンの母国語はスウェーデン語です。全くスウェーデン語を知らない私が、スウェーデンで研究活動や生活をしていけるだろうか？そういう不安は確かにありました。ただ、結論から申し上げますと、それは全くの杞憂でした。

スウェーデンでは、ほとんどの方が英語を理解し、英語が日常的に使われています。6ヶ月間生活をしましたが、英語が使えなかったことはほとんどありませんでした。研究活動のみならず、駅やスーパーマーケット、ガソリンスタンドなどでさえ英語が使えました。ビザの申請や在留許可証の発行手続きなどの書類も、全て英語で記入する様式が準備されており、スウェーデン語が必要になる場面はありませんでした。

唯一不便だったのは、書いてあるスウェーデン語が読めないことでした。半加工食品を買っても、どのように調理するかがスウェーデン語で書かれていて、英語で書かれていることはまずありません。ただ、これは翻訳サイトが解決してくれました。スウェーデン語から日本語への翻訳は若干心許ないこともありましたが、スウェーデン語から英語への翻訳は、誤訳も少なく実用に足ります。このおかげで、不便はありましたが困ることにはなりませんでした。

英語が母国語や公用語ではない国の中にも、国民の多くが英語を話す国はたくさんあります。例えばフィリピンは英語を公用語とする国の一つですが、国ごとの英語力の指標の一つである英語能力指数によれば、フィリピンは15位となっています。フィリピンより上位にある北欧諸国、オランダ、ルクセンブルクなどでは、母国語や公用語が英語でなくても、国民の多くが母国語同様に英語を理解し使っているようです。派遣先を選ぶ際は、このような国々も考慮に入れてみては如何でしょうか。新しい発見があるかも知れません。

3. 語学審査に向けて

募集要項を見ると、語学審査の免除基準の1つがTOEICで760点以上とのことでした。昔から英語が苦手で、その当時700点に満たなかったので、まずはこの点数を超えるべく英語の勉強を始めました。とはいえ、当時は残業が多く、忙しいときは、午前9時に出勤し、午前5時に帰宅、二時間だけ寝て出勤・・・という、悪い意味での「9時5時」が1ヶ月続くような部署にいたため、全く英語の勉強ができませんでした。

その後、残業のない部署に異動してから、本格的に英語の勉強を始めました。朝1時間早く出勤し、職場近くのカフェで参考書を使った勉強もしましたが、苦手だったリスニングのスコアがなかなか上がりませんでした。そんな中で、思いの外効果があったのは「英語の動画を見る」ことでした。今はインターネット上にいろいろな素材が転がっています。私は英国

放送協会（BBC）の娯楽番組が好きでよく見るようにしていました。「好きこそ物の上手なれ」とはよく言ったもので、リスニング用の教材は聞いても全然印象に残らなかったのですが、BBCは楽しんで見ていることもあり、集中して聞き続けることができました。毎日2時間程度動画を見るようにしたこともあって、リスニングの点数が安定して取れるようになり、結果、座学だけではほとんど上がらなかったTOEICのスコアも、平均的に800点位取れるようになりました。

語学審査が免除になるには、TOEICの他、TOEICスピーキング140点以上、ライティング150点以上が必要でした。試しに受験したところ、ライティングのスコアは基準に達したのですが、スピーキングが基準に満たず。慌ててスピーキングの練習を始めました。インターネット経由で外国に住む英語の先生の授業を受けることも検討したのですが、今回はスピーキングのスコアを上げることを優先したため、公式問題集を使って何度も練習を重ねました。ただ、スピーキングの練習はなかなかうまくいかず、1回1万円以上（！）の受験料を払い、10回以上受験しましたが、基準以上の点数が取れたのは結局一度だけでした。とはいえ、思い立ってから10年近くかかりましたが、何とか語学審査免除基準に達することができました。

なお、語学審査免除基準に達しなくても、人事院の実施する語学審査を受ければよいので、あまり心配はいりません。TOEIC等のスコアが審査免除基準に少し足りない位であれば、十分合格できると思います。

4. スウェーデン第二の都市ヨーテボリ

スウェーデン、と聞いて、どのようなことを思い浮かべるでしょうか？ボルボやサーブといった自動車メーカーを思い浮かべたあなた、多分車好きですね。往年の名曲「ダンシング・クイーン」でお馴染みのグループ「ABBA」を思い浮かべたあなた、多分若くないですね（笑）。ただ、メジャーな観光地ではないこともあり、他の欧米諸国と比べて馴染みは薄いかもしれません。実際、私も「北欧の国の一つ」というイメージしかありませんでした。

私が滞在したヨーテボリは、スウェーデン第二の人口規模（約50万人）を持つ街です。17世紀に北の獅子と呼ばれたグスタフ・アドルフ王が拓いたと言われ、大きな港湾施設を持っていたことから、18世紀にはスウェーデン東インド会社の本拠地が置かれるなど、古くからスウェーデンの貿易の拠点でした。ボルボの本社がある街で、自動車産業で働く方が多いようです。気候は、雨が多くすっきり晴れる日は多くなかった印象です。北海に面していることもあり、冬の最低気温も0度前後と、緯度の割に寒くありませんでした。市内にはトラムとバスが縦横無尽に走っており、市民の足となっています。



ヨーテボリ市内を走るトラム

5. 調査について

ヨーテボリ大学サルグレンスカ医学研究所公衆衛生地域医療部門には、「客員研究員」として赴任し調査を行いました。当部門では、医師、歯科医師、薬剤師、統計学者等様々な背景を持つ研究者が、協力してそれぞれの研究課題に取り組んでいました。また、当部門で国際共同研究をやっていることもあり、所属する研究員の出身国も、カナダ、インド、ベトナムなど幅広い国々から集まっていましたが、特に多いのは北欧諸国の方々でした。北欧諸国では、スウェーデン語やアイスランド語など、それぞれ母国語が違いますが、多くの人が英語を話します。さらに、例えば英語のみの授業で学位が取れる大学院のコースもあるようで、研究者はみな母国語だけでなく英語でも業務が遂行できるよう教育を受けています。このような環境にあるため、研究に必要な相談や打ち合わせなどは、全て英語でした。

スウェーデン国内の調査では、保健福祉省地域がんセンターやヴェストラ・イエータランド県レジスターセンター等へのヒアリングを行いました。これらの機関への調査では、部門内の研究員から機関の実務担当者の連絡先を教えてもらい、その方へ直接連絡を取るよう心がけました。こうすることで、日々どのようなデータをどのように扱うか、といった細かいところまで聞くことができました。



デ・コード社 Gudmundur Einarsson 博士（左）と

スウェーデン国内だけではなく、エストニア、アイスランドにも調査に出かけました。アイスランドでは、遺伝子情報を用いた研究を行う民間企業「デコード・ジェネティクス社」に伺いました。ここでは、研究についての話聞くだけでなく、遺伝子研究を行う施設や遺伝子標本（通常は血液）を冷凍保存しておく設備などの見学もさせてもらえました。研究者や設備管理者とも話をさせていただき、非常に有意義な調査になりました。

今回のヒアリングは、どこの訪問先でも英語で調査を行いました。英語に不安があったので、同じ研究室の同僚から話を聞いたり、各機関が発行する資料や学术论文等を入手するなどして専門用語や社会福祉制度など基礎的な知識を頭にたたき込みました。また、聞きたいことを事前にしっかりと英訳し、回答を聞き取ることに注力できるよう心がけました。話の流れで半分以上はアドリブで話すことになりますが、それでも事前に準備ができていると安心材料になります。ただ、話すことに集中してしまうと、相手の言っていることを理解しきれなくなることもあります。そのようなときのために、ICレコーダーで録音をしておき、終わってから録音を聞いて相手の発言を確認するようにしました。日本語で話を聞くのとは違い、準備などにじっくり時間をかける必要がありましたが、そのおかげもあって、ヒアリングではおおむね聞きたいことを聞くことができました。

スウェーデンのような英語を母国語としない国で英語のヒアリングをする際に、「相手の母国語で話す」ことは効果的でした。例えば挨拶だけでもスウェーデン語ですると、相手も簡単なスウェーデン語で返してくれたりして、初対面でも相手との距離が一気に縮まります。確かに、外国人と会話する際に、片言でも「こんにちは」と言われるとうれしくなるもの。英語を母国語としない方と会話する際は、是非相手の母国語での挨拶をやってみてください。

6. スウェーデンでの生活：①食事

スウェーデンでの食事は、ヨーロッパ内でも寒い地域と言うこともあり、南欧のような華やかさはありませんが、日本人の口に合わない感じではありませんでした。現地の方と同じような食事を取るよう心がけていましたが、主食はパンやパスタ、じゃがいもなどで、主菜は肉だったり魚だったり、困ることはありませんでした。パンは、日本の白い食パンのようなものは少なく、ライ麦や全粒粉を使ったものが多くありました。肉は、牛、豚、鶏、羊が多く食べられていました。魚は、スーパーでは鱈とおぼしき白身魚とサーモンしか見ませんが、教会のような建物の形から「魚教会」と呼ばれる魚介類専門店街では、鯖や蟹、ムール貝など、様々な魚介類が売られていました。また、「SASHIMI LAX」（LAXはスウェーデン語でサーモンの意味）という名前で生食可能なサーモンも売られていました。日本食はあまり食べなかったのですが、値段が安いこともあり、サーモンの刺身は結構な頻度で食卓に並びました。

スウェーデンでは、甲殻類をよく食べます。エビは日常的に食べる食材で、殻付きやむき身で売られていますし、レストランなどでもサラダやオープンサンドの上にむき身のエビが山盛りになっていたりします。また、夏にザリガニを食べる習慣があります。元々はスウェーデン国内で取れるザリガニを食べていたようですが、今では多くが輸入されているとのことでした。8月になると、家々で「ザリガニパーティ」なるものが開催され、大量のザリガニと強いお酒で大騒ぎをするそうです。我が家でも何度かザリガニを食べました。殻が堅く剥くのが結構面倒ですが、癖もなく、おいしくいただきました。スウェーデン人が夢中で食べるのも分かる気がします。

7. スウェーデンでの生活：②観光

土地土地の風土を知ることは、その国を知ることにもつながりますので、できるだけいろいろなところに行くようにしていました。旧市街の街並みが美しい首都のストックホルムや、ハンザ同盟の中心地であり、「魔女の宅急便」の街のモデルともなったビスビューなど、見所はたくさんありましたが、ここではスウェーデンの北部地方をご紹介します。

スウェーデンは、日本より広い国土を持つ一方、人口が1,000万人弱しかおらず、人口密度の低い国です。その中でも、ストックホルムやヨーテボリなど南部の街に人口が集中しているため、北部は、鉄鉱石の鉱山がある北極圏の街キールナや世界遺産ラポニア国立公園の玄関口であるイェーリバレなどいくつかの小さな村を除けば、人がほとんど入らない手つかずの広大な自然が広がっています。これらの大自然を実感すべく、キールナ近くのアビスコ国立公園とラポニア国立公園に出かけました。

アビスコでは、ハイキングやトレッキングが楽しめます。「王様の散歩道」と呼ばれる全長400キロ以上のコースがあり、所要時間や体力に応じて様々なトレイルが楽しめます。時間の関係で一周30分で回れるお手軽コースを回りましたが、大きな川が流れていたり、橋の上から滝壺を眺めたりと、短い割にかなり楽しく歩けました。

ラポニアでは、アビスコ同様ハイキングも楽しめますが、公園内にある資料館では、先住民であるサーメ人が暮らした生活の一端を垣間見ることができます。氷点下20度以下になることもある北極圏で、トナカイの毛皮をうまく使うなど知恵と工夫を巡らせて懸命に生きた人たちがいたことに驚かされました。

行ったのが7月上旬だったこともあり、北極圏内のこれらの村では一日中太陽が沈まない「白夜」でした。深夜0時に外に出てみましたが、日は傾いているものの地平線の下に沈むことはなく、その姿はまるで真夏の夢の蜃気楼。時を忘れていつまでも眺めていました。

ただ、広大な自然の中にいるため、移動は大変です。隣の村が100キロ近く離れていたり、公園の入口から目的の湖まで数十キロ離れていたり。港町ルーレオまで飛行機で行き、そこでレンタカーを借りましたが、四日で1,000キロ以上走りました。とはいえ、高速道路はないものの制限速度は時速100キロで思ったより時間はかからず、その間のドライブも景色のいいところを走るので快適でした。さらに時々鹿などの野生動物にも出会えて、楽しく過ごすことができました。ヨーテボリに約半年住んで、ストックホルムやマルメといった都市部ばかりを見てきましたが、北部の広大な自然を体験して、一言で「スウェーデン」と言っても、地域によって全く環境や文化が異なることを実感しました。



路上に鹿が！

8. 最後に

短期在外研究員制度は、半年という短い期間ではありますが、外国での業務や調査を通じて外国の文化や仕事のやり方を学び、語学力を向上させることができるなど様々な効果が期待できます。調査からだけではなく、実際に生活することで分かることも多くありました。スウェーデンでは、10時か15時に「フィッカ」と呼ばれるコーヒーズブレイクの時間があり、コーヒーズを飲みお菓子を食べながら他の研究員とおしゃべりをして過ごします。研究の話だけではなく、自分の家のこと、家族のこと、夏休み（約1ヶ月間のバカンスがあります）のこと、ふるさとのこと等、様々なことを話しますが、雑談の中にも思いがけない発見があ

ります。スウェーデンの住民登録番号制度は、70年以上の歴史を持ち、様々な形で民間利用もされている先駆的な仕組みで、万人が喜んで受け入れていると思っていたところ、「インターネットで自分の住所や年齢が調べられるのは、ホントはちょっと嫌なんだよね」という否定的な意見が聞けたのは、雑談中の会話だからこそだと思います。ただ残念なことにこの制度の知名度は高くありません。ある省庁の地方局に勤める友達は、この制度の存在すら知りませんでした。本稿を通じて、人事担当を含む多くの職員にこの制度について理解を深めていただき、活用していただけるよう願っています。